

# 日本経済新聞

## エネルギーの安定供給、健康にもプラスの影響



新潟県の東京電力柏崎刈羽原子力発電所 6 号機が 4 月 16 日、営業運転を再開しました。およそ 14 年ぶりの再稼働で、日本のエネルギー政策にとって大きな節目となりました。

昨年 11 月、同発電所の職員に「放射線とがんのすべて」をテーマに講演する機会があり、現地を視察しました。東京電力福島第 1 原発の事故を教訓に、現場では徹底的な安全対策が施されていました。想像よりも明るい雰囲気、活発なコミュニケーションと安全意識の高さを感じました。

ただ、1 月 21 日の再稼働直後に電気系統のトラブルが発生し、営業運転が大きくずれ込みました。安全な運転に全力を尽くしてほしいです。

柏崎刈羽 6 号機の再稼働で期待されるのは電力需給の安定化です。エネルギーの安定供給は、健康にも大きな影響を及ぼします。

日本では冬の低温に起因する死亡が全体の約 1 割を占めるとされています。夏の熱中症予防に必要なエアコンも電力が欠かせません。暑さや寒さは、とりわけ高齢者や基礎疾患を持つ人の健康に影響します。空調は単に快適に暮らすためだけでなく、健康を支える重要なインフラなのです。

医療機関での生命維持装置や検査機器にも電力は不可欠です。東日本大震災直後に首都圏で実施された計画停電で、病院は大混乱となりました。

私の専門であるがんの放射線治療でも大量の電力を必要とします。東大病院を含めほとんどの放射線治療施設では、光速近くまで加速した電子を金属に衝突させて X 線を発生させ、がん病巣に照射します。X 線治療の年間電気代は治療装置 1 台当たり数百万円程度です。

他方、水素の原子核（陽子）を加速して照射する陽子線治療や炭素の原子核を使う重粒子線治療では、加速する粒子が電子よりはるかに重いため、電気代は高額になります。陽子線治療で治療装置 1 台あたり年間数千万円、重粒子線治療になると同 1 億円近い電気代がかかります。長野県の陽子線治療センターが休止し、兵庫県立の重粒子線治療施設も廃止を決めている理由の一つが、かさむ電気代といえるでしょう。

医療だけでなく、データセンターの増加などで電力需要が爆発的に増えています。ホルムズ海峡が事実上封鎖され、化石燃料の調達に大きな影響が出ています。原子力発電に用いられるウラン燃料は、高市早苗首相が訪問したオーストラリアなど日本と親密な国々から安定的な調達が可能です。

安定的で安価な電力の供給は、国民の健康を守り、がん治療含む医療を支え、産業競争力を回復するためにも不可欠といえます。柏崎刈羽原子力発電所の貢献に期待を寄せています。

2026 年 5 月 13 日